

梶田叡一著「<自己>を育てる－真の主体性の確立」子どもの発達と教育 2、金子書房、1996年5月30日刊を読む

### 内的な根拠をもつ「がんばり」を

1. 外的に強制された「がんばり」でも、内的な呪縛による「がんばり」でも駄目であるとしたら、いったいどのような「がんばり」が望ましいのであろうか。
2. (1) その第一は、内的に手応えがあり、やりがいを感じるから、ということでの「がんばり」である。  
(2) 達成感、効力感に支えられた「がんばり」といってよいであろう。
3. (1) 何かをやっているなかで、「ああ、できた!」「自分にもやれるんだ!」という体験をすると、それがひとつの自信になり、新たな何かをやっていくときの弾みになる。  
(2) こうした体験が積み重なっていくならば、新しい課題に対して、無理のない形で積極的に取り組むことができるようになるであろう。
4. (1) こうした達成感、効力感をもたせるためには、子どもが何かをうまくやったときには積極的にそれを認め、誉めてやりたいものである。  
(2) また、はじめからむずかしい課題を与えるのではなく、といてやさしすぎる課題を与えるのではなく、がんばってやれば達成できる、という程度の課題を与えるよう努めなくてはならないであろう。
5. (1) 第二は、自分にとって大事なことから、ということでの「がんばり」である。  
(2) 課題の意義を理解し、そこに自我関与することによって出てくる「がんばり」といってもよい。
6. (1) 面白くないことであっても、なかなかやりがいが感じられないことであっても、それが大事なことであると思えるなら、自分を励ましてがんばっていけるはずである。  
(2) 特にそれが何らかの意味で自分に大きなかわりをもつことが実感されるなら、積極的に取り組んでいけるであろう。
7. (1) だからこそ親や教師は、子どもに対して課題を無理強いするのではなく、その課題がどういう意味をもつものであるのか、どうして大事なのか、どういう点であなたとかわってくるのか、といったことを説いてやらなくてはならない。  
(2) 特に、子どもががんばって勉強するようになってほしいならば、勉強することそれ自体の大切さ、そこでの学習課題の大切さについて、手を変え品を替えて説いてやる必要があるのではないだろうか。

(3)もちろん、子ども自身がそうしたことについて自分で考えてみたり、友達と話し合ってみたりする機会も設けたいものである。

8. (1)第三は、しんどいことだからこそ逃げないで立ち向かう、ということでの「がんばり」である。

(2)対処的(coping)な姿勢に土台をもつ「がんばり」といってもよい。

(3)戦国時代の武将・山中鹿之助は月に向かって「我に七難八苦を与えたまえ」と祈ったという。

(4)また江戸時代の儒学者・熊沢蕃山は「憂きことのなおこの上に積もれかし、限りある身の力ためさん」という歌を残している。

(5)引き受けざるを得ない困難に対して逃げやごまかしの姿勢をもつことなく、積極的に立ち向かっていこうとする態度こそ、ここでの「がんばり」の底にあるものであろう。

9. (1)こうした点について子どもに自覚させるのは、子どもが小学生くらいの時期には、必ずしも容易でないかもしれない。

(2)しかし、繰り返しこのことを説いていくと共に、ごまかしてでも安易な方に行こうとする場合には厳しくたしなめ、指導していくようにしなくてはならないであろう。

<「がんばり」を越えた「がんばり」のために>

10. (1)内的な根拠をもつ「がんばり」ということでここにあげた3つのタイプは、いずれもどこか悲愴な面もちがないではない。

(2)いずれも、明るく楽しくがんばる、というわけにはいかない面がある。

(3)自分自身の弱さをみすえ、ひるむ心を励まし、自分自身を何かで支えて一步一步前に向かって進んでいく、という基本性格がどうしてもあるのである。

11. (1)もちろん、こうした「がんばり」は、われわれが生きていく上で、さらにはわれわれが成長していく上で不可欠のものである。

(2)しかしやはりどこかに、しんどい思いがつきまとわざるをえない。

(3)それでは、そうしたしんどさのない「がんばり」、明るく楽しいままでの「がんばり」というものは存在しないのであろうか。

12. (1)しんどい思いのない「がんばり」は、たしかに、もう本来の「がんばり」ではないかもしれない。

(2)しかし、しいていえば、たとえば面白いから自然にがんばってしまっていた、がんばっているとも思わず没頭してしまっていた、といったような形の「がんばり」がある。

(3)遊んでいるのかがんばっているのかわからないようなタイプの「がんばり」である。

- (4)がんばっているとか苦しいとか大変とかいう意識なしに何かに没頭しているようなタイプの「がんばり」である。
- (5)これが実現できれば素晴らしいであろう。
- (6)しかしながらそれは、人生の達人でなくてはとうてい無理なのかもしれない。
- (7)あるいは、そのことに淫してしまうくらい没頭している人でなくては無理なのかもしれない。
13. (1)たとえば、天才的な彫刻家が素材である木のなかからひとつの像を刻み出そうと、疲れを忘れ、寝食を忘れて鑿をふるっている姿などにもときにこういうものではないだろうか。
- (2)大変そうに見えても、当人にとっては、面白くて仕方ない活動なのかもしれないのである。
- (3)マラソン選手が朝早くから長い道のりを黙々と走り込んでトレーニングしている姿も、こういうものであることがあるのではないだろうか。
- (4)あるいは、作家や評論家などが寝る間も惜しんで白々と夜の明けるまで執筆に没頭している姿も、こういうものである場合があるのではないだろうか。
14. (1)そのこと自体が好きでなければ苦行でしかないが、自分の与えられた使命として、苦しいとも何とも思わずにそのことに没頭しているなら、みかけは苦しくとも当人にとっては楽しみであり充実であろう。
- (2)これはもう表面的なみかけからいうと「がんばり」であっても、本当は「がんばり」とはよべないものかもしれないのである。
15. (1)こうした没頭が可能になるためには、その活動そのものに使命感をもち、好きになり、暇さえあればそれをやっていたい、という気持ちにならなくてはならない。
- (2)子どもは本来、普通の大人に比べて、そうした没頭を日常的に経験することが多いはずである。
- (3)時間も周囲のこともみんな忘れて何かに没頭するという体験を、家庭でも学校でも大事にしてやりたいものである。
- (4)子どもの顔を見たらいつでもすぐに「何ボヤボヤしてるの!」「ちゃんとやることをやんなさい」と口喧しくいうばかりでは、子どもはそうした没頭体験と縁遠くなってしまわないだろうか。

P74 ~ 79

[コメント]

「がんばる」「がんばり」とは何か、どのように「内的な根拠をもつがんばり」「がんばりを越えたがんばり」に至ることができるのかをよく示した梶田先生の本著は、教育を担う人すべての必読書と考える。